

V 水稻「つや姫」の特性と栽培上のポイント

1 来歴

1998年に山形県立農業試験場庄内支場（現在の山形県農業総合研究センター水田農業試験場）において、「山形70号」を母、「東北164号」を父として人工交配を行い、その後代から選抜育成された。

2 品種特性

- ・出穂期及び成熟期は「コシヒカリ」とほぼ同等の極早生品種である。
- ・草型は“中間型”で、葉が直立し受光態勢が良好である。
- ・稈長は短く、「コシヒカリ」より耐倒伏性に優れる。
- ・収量性は「コシヒカリ」と同等に高い。
- ・玄米の外観品質は「コシヒカリ」に比べて良好で、光沢が優れる。
- ・食味は“上”で、「コシヒカリ」と同等に優れる。
- ・葉いもち圃場抵抗性は“やや強”で、「コシヒカリ」に比べ強い。
- ・穂いもち圃場抵抗性は“強”で、「コシヒカリ」に比べ強い。
- ・高温登熟性は“中”で、「コシヒカリ」に比べて優り、白未熟粒の発生が少ない。

第1表 「つや姫」の特性表

項目 / 品種	つや姫	比)コシヒカリ
出穂期(月日)	7月27日	7月28日
成熟期(月日)	8月27日	8月27日
稈長(cm)	72.5	83.8
穂長(cm)	18.5	20.0
穂数(本/m ²)	377	374
草型	中間型	中間型
倒伏程度	0.2	2.3
穂発芽性	やや難	やや難
葉いもち抵抗性	やや強	やや弱
穂いもち抵抗性	やや強	弱
高温登熟性	中	やや弱
耐冷性	やや強	強
収量(kg/10a)	528	526
玄米千粒重(g)	22.6	22.5
検査等級	1等下	2等上
食味	上	上

- ① 水稻奨励品種決定調査成績(H27,28,30,R1,2)の5年間平均値
- ② 移植期は5月第2半旬、10a当たり窒素成分 基肥3kg、穂肥3kg
- ③ いもち抵抗性及び耐冷性は中山間地域研究センター成績
- ④ 倒伏程度は0(無)～5(甚)の6段階

3 栽培管理のポイント

【重要】特別栽培基準に準じた栽培管理を行うこと

- ①化学肥料の窒素分量の合計が慣行の5割以下となること
4 kg/10a 以下 (慣行レベル 8 kg/10a)
- ②節減対象農薬の使用回数(成分)の合計が慣行の5割以下になること
10回(成分)以下 (慣行基準 20回(成分))
- ◎栽培期間は、前作物の収穫以降から当該農産物の収穫調製までの期間

(1) 普及適用地域

県内平坦地域

(2) 栽培適期

早植栽培(5月上旬～下旬移植、8月下旬～9月中旬収穫)に適する。

(3) 土づくり

堆肥等有機物や土づくり資材の施用、深耕、稲わらの腐熟促進対策に努める。

(4) 育苗

- ・種子消毒剤や温湯消毒による種子消毒を行う。
- ・浸種は、積算水温で100℃を目安とする。
- ・催芽は、30～32℃で24時間程度を目安とし、鳩胸状態を確認する。
- ・1箱当たりの播種量は、稚苗の場合乾粒で120gとする。
- ・育苗初期(出芽～緑化期)の温度管理が高いと、軟弱徒長苗になるので注意する。

(5) 移植

- ・移植時期は、5月上旬～下旬頃を適期とする。
この場合、出穂期は7月下旬～8月上旬、成熟期は8月下旬～9月中旬頃となる。
- ・栽植密度は、60株/坪(株間18cm、条間30cm)を基準とし、極端な疎植は避ける。
- ・1株植付本数は、3～4本/株
- ・極端な浅植や深植は避ける。

(6) 施肥管理

ア 施肥の目安(10a当たり)

◆総窒素施用量	体系施肥	5.0kg
	一発施肥	5.0kg
(但し、化学肥料の窒素分量の合計 4.0kg以下)		

■体系施肥の場合

◇基肥：窒素分量 3. 0 k g

- ・地力の低いほ場では、窒素成分で1kg/10a程度増施し、高いほ場では、窒素分量で1kg/10a程度減肥する。

◇穂肥：窒素分量 2. 0 k g 出穂前 25 日前 1 回

- ・幼穂長 1mm
- ・葉色 葉色スケールで4～5 (SPAD 値 35～40)
- ・葉色が葉色スケールで上記の値をこえる、または茎数が極端に多い場合は、施用時期を遅らせた上に減肥する。

■一発施肥の場合

◇基肥：窒素分量 5. 0 k g

- ・地力の低いほ場では、窒素成分で1kg/10a程度増施し、高いほ場では、窒素分量で1kg/10a程度減肥する。

◇追肥：窒素分量 1. 0 k g 程度

- ・幼穂形成期頃に、葉色スケールで4 (SPAD 値 35) 以下まで淡くなり、肥効が続かないと判断された場合は速やかに追肥する。
- ただし、追肥を行う場合は、特別栽培基準に留意する。

イ 有機質肥料を施用する場合は、肥効を考慮して施用時期は早目に行う。

(7) 農薬散布 (雑草防除、病虫害防除)

必要最小限の防除にとどめ、農薬使用の縮減に努めること。

(ただし、節減対象農薬の使用回数 (成分) 合計 10 回以下)

ア 雑草防除

- ・除草剤を使用する場合は、雑草の発生状況を見て適期に散布する。

イ 病虫害防除

- ・地域の病虫害発生状況を考慮して、効果的な防除計画を立てる。
- ただし、病虫害が多発した場合は、農薬の使用回数に注意して適切な防除を行う。

(8) 水管理

- ・過繁茂を防ぎ健全な根の発育を促すため、間断かん水や中干しを徹底する。
- ・出穂後25日頃までは間断かん水を継続して登熟を促進を図る。早期に完全落水をしない。
- ・その他は基本的な水管理を徹底する。

(9) 収穫

- ・収穫時期は、青味率10～15%になった時を適期とする。

(10) 乾燥・調製

- ・乾燥は、胴割米の発生に注意し、水分15%に仕上げる。
- ・ライスグレーダー (1.9mm選別ふるい目) 等による適正な調製を行う。